

若手教員に聞く！ 現場の実態(1)

～教師は本当にブラックなのか？～

伊藤貴昭（明治大学文学部）

飯塚和幸（明治大学附属中野中学・高等学校）

1. 企画の実施にあたって

近年、学校現場では公立学校、私立学校を問わず、教員不足が叫ばれている。たとえば文部科学省もこのことを認識しており、2018年8月には、初等中等教育局が「いわゆる『教員不足』について」と題して資料を公開しており、その中で具体的な対応策も示している。ここでの教員不足の定義は、「学校に配置されている教員の数が、各自治体において学校に配置することとしている教員の数を満たしていない状態」とされており、調査対象となった各自治体で教員が不足している実態が明らかになっている¹。

教員不足の背景には、教員の勤務時間が長時間に及ぶことや保護者対応の複雑化などが表面化し、一部では「ブラック」であるとの報道もなされていることがあるだろう。また教員免許更新のための負担増加や、一時離職した教員が免許状の有効期限を迎え、すぐに現場に復帰できないことなども挙げられている。なお、教員免許更新に関しては、2021年3月に萩生田文部科学大臣が「抜本的な見直し」について早期に結論を出すよう中央教育審議会諮問するなど、今後、動きがあることも予想される。

教員不足に対して、公立学校を中心に、一部の自治体では待遇面を明確にするなど動きがみられる。私立学校の場合は、一般財団法人日本私学教育研究所が、各都道府県私学協会加盟の私立学校から寄せられた教職員募集情報の概要をホームページで公表しているが、待遇面などの詳細が公開されていることは稀であり、ほとんどのケースでは採用直前になり、その実態を知ることになる。「聖職としての教師像」が維持されている面もあり、他の業種に比べ、明らかにされていないことも多く、学生が職業として選択しにくい側面もあると考えられる。

以上のことから今回は、私立学校に勤務する若手教員の協力を得て、『若手教員に聞く現場の実態～教師は本当にブラックなのか？～』と題した、パネルディスカッションを行った。パネリストは次項に紹介する4名である。企画にあたって、教職課程を履修している学生から、あらかじめ質問事項を募集し、質問の多い項目に関して、4名の方に回答していただく形式とした。なお学生からの主な質問事項については3に示す。

（飯塚和幸）

¹https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/_icsFiles/afieldfile/2018/08/08/1407922_10.pdf

2. 企画の概要

① 開催日時

2021年3月25日(木) 16時～18時

(終了後19時までパネリストが残って下さり、学生からの質問に回答いただいた。)

② 開催方法

Zoomによるオンライン開催

司会・パネリストのみカメラオン、その他の参加者は任意とした。

新規の質問は、チャットで受け付け、該当の先生に適宜回答いただいた。

③ 参加者数

当日参加者総数(77名)

— 明治大学教育会会員 13名(申し込み人数)

— 学生および科目等履修生 64名(事後アンケート回答数)

④ パネリスト

楠田 航先生(英語科)

2020年3月 情報コミュニケーション学部卒業

2020年4月 明治大学附属中野八王子中学高等学校専任教諭

佐藤恭央先生(社会科、地理歴史科・公民科)

2015年3月 明治大学文学部史学地理学科地理学専攻卒業

2015年4月 鎌倉学園中学校・高等学校専任教諭

高野晃多先生(社会科、地理歴史科・公民科)

2015年3月 明治大学文学部史学地理学科日本史学専攻卒業

2017年3月 明治大学大学院文学研究科史学専攻日本史学専修博士前期課程修了

2017年4月 文教大学附属中学高等学校非常勤講師

2018年4月 攻玉社中学高等学校非常勤講師(兼任)

2019年4月 校成学園女子中学高等学校 専任教諭

峯岸優介先生(国語科)

2014年3月 明治大学文学部文学科日本文学専攻卒

2014年4月 國學院高等学校専任教諭

⑤ 内容

1) 役員挨拶

2) 私学の採用システムと情報提供

3) 参加者からの質問への回答 ※質問内容は事前にアンケートを実施

4) 質疑応答

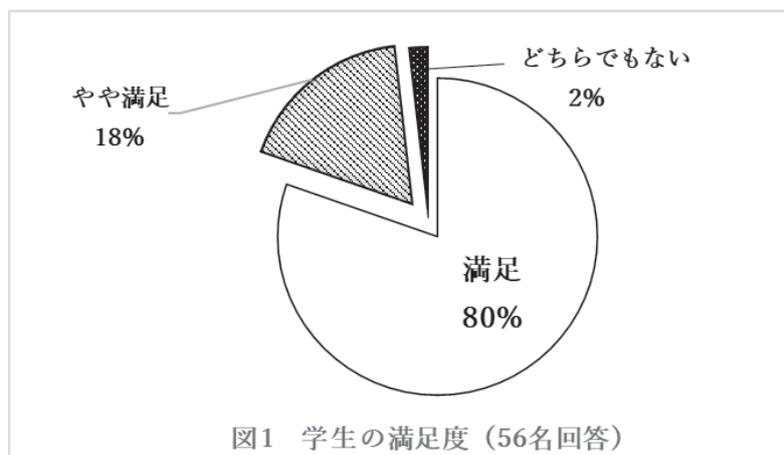
3. 学生からの質問事項(抜粋)

- ① きっかけ
 - 私立学校を選んだ理由やきっかけは何か？
- ② 採用関係
 - 私学教員を目指すにあたっての準備
 - 学校をどのように探したか？
 - 私学適性検査や私学の採用について
 - 採用当初の雇用形態
- ③ 待遇関係
 - 私立教員の給料、残業代等について
 - 有給、休暇について
 - 担当授業数
 - 研修制度について
- ④ 教科指導・部活指導について
 - 授業準備
 - 専門外教科の担当有無について
 - 部活の顧問について
 - 部活指導の時間・日数・休日の扱い
 - 進路指導について
- ⑤ その他
 - 保護者対応
 - 職場の人間関係

4. 学生からの声

学生アンケートの結果の概要は以下の通りである。

- ① 企画の満足度（満足、やや満足、どちらでもない、やや不満、不満）



② 学生の声

1) 参考になったこと

- ・私立を検討する材料になった
- ・具体的な勤務状況や給料など
- ・私立の教員採用の実際について
- ・適性検査について
- ・教師としてのやりがい
- ・大学院進学との関係について
- ・将来をイメージしやすくなった
- ・教員を前向きに考えることができた
- ・採用に向けての心構え
- ・Zoom だと参加しやすかった

2) これからやってほしい企画

- ・教師の属性を変えて同じような企画
例) 公立、女性、理系、社会人経験ありの教員、ベテラン、日本人学校など
- ・採用に向けた情報収集
例) 在学中にすること、同じ道を目指す人との交流、学校情報など
- ・教師の資質能力にかかわること
例) 授業づくり、授業見学、授業以外の仕事についてなど

5. パネリストから寄せられた感想

企画終了後に、パネリストの先生方から、それぞれ感想を寄せていただいた。以下、いくつか紹介する（企画者が改編しています）。

- ・私立学校の若い先生方と一緒にパネリストとして参加でき、貴重な経験となった。
- ・自分自身も勉強になることが多く、有意義な時間を過ごすことができた。
- ・多くの学生が積極的に参加する様子から、自分も責任をもって仕事をし続けるべきであると再認識した。
- ・オンライン開催に不安を感じていたが、始ってみるとその不安は消え去った。
- ・今回参加した学生が、教員の魅力、私立の特色などを感じ、教員を志してくれると嬉しい。
- ・先生方や後輩の前で話すこと自体が自分にとっていい機会となった。
- ・教員の現場の具体的な様子を学生に伝えられよかった。
- ・チャットを利用して、学生や先生方の質問や返答を共有できたというやり方は非常に有効で、その意味でも Zoom での開催は有意義だった。

6. 最後に

2020年、世界中に広まったコロナウィルスの感染拡大は、教育現場にも大きな影響を及ぼすものとなった。学校は休校を要請され、ほぼすべての教育活動がストップするという前代未聞の事態に陥った。「子どもの学びを止めるな」という認識のもと、現場の教員は急遽、家庭学習用の教材を用意したり、慣れないオンライン授業を実施したりと、これまでには想像もつかなかったような対応が突然求められることになった。

この状況下において、本教育会の活動も大幅に制限されることになった。例年11月に実施していた研究大会も、総会のみをオンライン開催という規模を縮小したものにせざるを得ない状況となった。必然的に、研究大会時に行われていた講演や分科会は開催されず、会員の皆様が集う場所、学ぶ機会を提供できないことになった。

一方で、この危機的状況の副作用として、ほとんどの教育関係者が不慣れであったであろうオンラインでの取り組みが、急速に広まることにつながった。Web会議システム（Zoomなど）を利用した会議はもちろんのこと、これを授業や学会活動にも利用していくことに、大学や学校現場に関わる人々も慣れていくことになった。今回の企画が実現したのも、こうしたオンライン活用に対する慣れや拒絶感の軽減が大きく影響しているだろう。たとえば、パネリストの先生方は各学校の教室等からご参加いただいたが、これが仮に駿河台キャンパスでの対面開催であればご参加いただくことが難しかったかもしれない。このことは一般参加の会員や学生にも同様に当てはまることから、オンライン開催の利点がうまく活用された企画であり、今後の可能性を感じさせるものであった。

さて、パネリストの先生には、将来的に教員志望者の増加が見込める（かもしれない）こと（のみ）を誘い文句に、なんと無償でご参加いただいた。パネリストとしての登壇依頼にご快諾いただいたこと、当日の長時間にわたる熱いメッセージにあらためて感謝の意を表したい。なお、パネリストの先生からは、他の学校の様子や自分と同世代の先生の様子などが刺激になったことに加え、学生に向けて発信するという機会自体が自身の振り返りにつながるなどのメリットもあることを挙げていただいた。まさに「学び続ける教師」を体現されているパネリストの先生方だったといえる。今後は、登壇者の好意に甘えるだけの企画ではなく、登壇者本人にとってメリットになるような会の運営を検討していきたい。

今回の「若手教員企画」は、企画者の心積もりとしては第一弾として設定したものである。「学生からの声」で示した今後期待する企画も考慮し、最前線で活躍する先生方にとっても学びのあるような企画を模索・立案し、第二弾、第三弾と開催していけるよう尽力していく所存である。今後も引き続き、会員の皆様からのご協力をお願い申し上げ、まとめとしたい。

（伊藤貴昭）